令和３年度　江戸川区立船堀小学校　学校関係者評価　最終評価用報告書

学校教育目標	よく考えすすんで学ぶ子　　思いやりがある心豊かな子 さいごまでやりぬく子　　たくましくじょうぶな子	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	確かな学力とあたたかい心、地域を愛し次の時代を担う意識を高くもち、夢や希望を育てる学校 すすんで学び、共に認め合い、めあてをもって粘り強くやり遂げ、未来に向かって歩む児童 深い児童理解のもと、児童の成長を信じ、主体的に考え研鑽し課題意識をもって積極的にかかわる教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	＜成果＞コロナ禍でも、スポーツの選手や生物や伝統芸能や伝統文化などの専門家をよび、各学年で出前授業として実施したことにより、児童が関心をもち、探求心を高めた。 担任、専科などと保護者の面談を行ったことで、保護者の様々な相談を受けることができた。外遊びをする学級を定めたことで学級の全員が外遊びをすることとなった。 ＜課題＞特別な支援が必要な児童の理解と保護者理解。保護者の特別支援教室（エンカレッジルーム）の理解の推進。通常の学級での特別支援教育の推進。		

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		来年度に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・「確かな学力向上推進プラン」の実施・改善や補習　の実施などによる指導の充実と授業力の向上 ・「各教科等の連携教育プログラム」による連携の充実	・わかる・楽しい・もっとやりたい授 業の展開と個に応じる指導 ・年間を通して外部講師による補習を2年生以上実施。1年生は2学期後半以降実施。 ・授業のﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ化	・授業の流れの提示、視覚的な 提示、わかりやすい発問と個に応じる指導の毎時間実施。 ・2～6年による放課後補習年150回実施。 ・毎回の授業で、船堀小学習スタンダードと学力向上ﾌﾟﾗﾝを授業で実施。	A	B	・年8回の校内研究授業などを通して、主体的で対話的な深い学びの実現を目指し、教員一人一人が授業改善に取り組んだ。全国学力調査においても、都や区に比べて本校児童の平均が高い結果となった。 ・補習教室では、個に応じた課題を通して、基礎的な学力の定着を図った。 ・補習教室実施回数150回達成。	A	・学力調査の結果が、東京都や江戸川区の平均以上であることはすばらしく、地域の中学校の学力向上に寄与している。 ・学習発表会では、日常の学習の成果がわかり、学習への意欲が作品に表現されていて、学力向上を感じた。 ・今後は、指導の個別化、学習の個性化によって児童それぞれの興味関心を引き出したり、協働して学ぶことに臨むと、さらに学力が向上し、確かなものになる。	・校内研究において各学年で得られた成果を基にしながら、さらに学習に課題がある児童の見取りを大切にし、個に応じた指導を学校全体で行っていく。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の充実 （読書科ノートの活用、資料の収集の仕方や記録の取り方の指導、自己の考えをまとめ表現する方法の指導、朝読書と1単位時間の授業との関連付け、他教科との関連等） ・学校図書館の整備、学校図書館を使った授業の充実	・図書を活用した授業の実践による、調べ学習の成果。 ・計画的な学校図書館の利用 ・朝読書などで様々な分野の本を読む。	・全員が探求的な活動による成果物を作成 ・図書館の活用は年間10回以上。 ・複数の分野の本を読む。	B	B	・探究的な活動は、1年生7時間、2年生6時間、3年生12時間、4年生8時間、5年生7時間、6年生10時間取り組むことができた。 ・全学年10間以上図書館を活用した。来年度はさらに内容の充実を図る。 ・朝読書の記録を取り始めたことで、めあてに基づいて読書の幅を広げることができた。また、担任が読書分野を広げるための声掛けをする一助となっている。 ・地域図書館をとり、連携を1年生ではアニマシオンを、2年生では図書館見学を行うことができた。	A	・江戸川区内の小学校の特色としての読書科は大事であるため、継続して励んでもらいたい。 ・目的意識をもって読書する姿が思い浮かんだ。自分の興味のない分野に読書を広げることに難しさを感じる。授業で関連図書を取り上げることに加え、友達同士のおすすめの本を紹介し合う機会をもってはどうか。	・図書館の活用について、各学年でアイデアを出し合い、ただの読書の時間とならないよう、教員間で情報共有を行う。
	体力の向上	・体育の授業や休み時間における全校運動遊びなど主体的な運動の実施による運動意欲の向上	・教員が一緒に休み時間に遊ぶことで密にならない運動遊びの仕方を理解させ、その後につなげる。毎週の学級運動遊び。全校で同時期に縄跳び,持久走への集中した取り組み ・授業中の運動時間の確保	・毎週の学級ごとの運動遊び。 児童アンケート90％以上	B	B	・全校で取り組んだ長なわや持久走では、記録を掲示したり学習カードを活用したりすることで、児童に意欲的に取り組ませることができた。 ・定期的に整とん・手入れすることで、教具を扱いやすい環境を保った。授業中の道具の準備にかける時間を減らし、運動時間を確保した。 ・児童アンケート92％	B	・コロナ禍での取り組みに苦労があったことと思う。 ・道具の使い方等、道徳的なことも取り入れ指導改善しようとする姿勢がよい。	・「使った道具をもとの場所に戻す」ということをしっかりと定着させることで、いつでもきれいな体育倉庫を保っていけるようにする。
	オリパラ教育の推進	・「オリンピック・パラリンピックレガシー創造プラン」に基づく取組、「学校2020レガシー」の設定やオリパラコーナーの充実	・年間計画に基づいたオリパラ教育の実施 ・オリンピック・パラリンピックの価値を感じるスポーツ観戦の実施 ・国際理解、障がい者理解	・毎月のオリパラ給食（外国と日本各地）の実施。 ・発表やｵﾘﾊﾟﾗｺｰﾅｰ等の展示 ・TVによる各学級1時間以上の観戦・児童アンケート80％以上	B	B	・各月ごとにオリパラ給食を提供し、食文化や風土への興味関心を引き出した。・児童アンケート91．5％ ・7月に参加したフラワーレーンプロジェクトで、各学年から大会への応援メッセージを届けた。 ・夏休みの自由課題で各学年児童がオリパラの調べ学習を行い、9月にオリパラ作品の展示を行った。 ・9月にTVを通してパラリンピック観戦を行い、各学級でパラスポーツの精神に理解を深めることができた。 ・10月よりアスリートとの交流を各学年で1回実施。芸術鑑賞教室で和楽器アンサンブルとの交流を行った。 ・狂言・能・寄席の文化人との交流を行うことができた。	B	・子供たちが、オリンピック・パラリンピックを見学できなかったことは残念であった。 ・東京オリンピック・パラリンピックだけの取組に終わらせることなく、継続していくことに難しさを感じる。 ・給食指導を充実させつつ、歴史や文化、障がい者支援などあらゆる可能性を探ってみてほしい。	・毎月のオリパラ給食実施を継続する。 ・年間指導計画の中で取り組めるように資料の提供を行う。
	外国語教育の推進	・授業力の向上とALTの効果的な活用	英語専科とALTとの連携による年間計画に沿った授業展開	外国語の授業での積極的な参加95％以上	A	A	・単元目標や場面設定の工夫により主体的に取り組む児童が多く、約95％の児童がすすんで英語でコミュケーションを図っている。 ・苦手とする児童には個別的な支援を行った。	A	・英語でのコミュニケーションを子供たちが楽しんでいるとよい。 ・外国語活動から外国語科、また小学校から中学校へのギャッ	・児童がすすんで英語を話したくなる課題や場の設定を行い、言語活動を充実させる。
	健全育成に向けた取組の強化	・いじめ・不登校の未然防止に向けた魅力ある学校づくりの取組の充実 ・チルドレン・サポートチームや生活指導連絡協議会の活用	・変化をとらえて、学年・組織対応早めの対応。ふれあい月間ｱﾝｹｰﾄの活用	・毎学期1回のいじめ授業の実施。SNSルールを用いた指導の実施（1回以上）。 ふれあい月間（6月、11月、2月）の取組での児童面談にてていねいに聞き取る。 児童アンケート80％以上	A	B	・ふれあい月間では、アンケートと教員の観察や保護者からの訴えによりいじめの定義から積極的に把握した。必要に応じて個別の聞き取りや指導も行い、把握したことは継続的に状況を見守る体制を作り、いじめが改善されるまで行っている。その結果、いじめを訴えた児童の問題を解決することができている。 ・児童アンケート「友達と仲良く過ごせている」96％ ・SNS・いじめの授業年間2回実施	A	・大人からは見えにくい「いじめ」に学校で注意して見てもらいたい。 ・SNSなどの目に見えないところでのいじめが増えていることに配慮してほしい。	・現在の取組を継続していくとともに、サポートチームや生活指導連絡協議会などとの連携を図るようにする。

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		来年度に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
	食育の推進	安全に給食を行い、食の幅を広げ、季節感を感じ、食への関心を高める。	・コロナ感染防止対応の給食の仕方（黙食・間隔を空けて並ぶ）の徹底 ・季節感や文化を感じさせる給食の提供や講話。 ・食育年間指導計画に基づいた指導の実施	・安全な提供と給食指導の徹底と定着。毎回黙食、間隔を空けて並ぶことの確実な実施 ・毎月の郷土料理や外国の料理の提供と説明（文書や放送を含む） ・和食の日・給食週間の講話。味覚の授業実施。 ・食育年間指導計画の確実な実施	B	B	・「SDGsみんなの取り組み」を実施し、全校全員が同じ給食を味わうことができた。 ・3年生が小松菜農家に見学に行き、教科と絡めて興味・関心をもてた。 ・食育年間指導計画では、コロナのため制約があったが、できる範囲で実施した。 ・毎月の郷土料理や外国の料理の提供と説明実施。	B	・小松菜などの郷土料理が給食にでることは、楽しみとなるし、とても良いので続けてほしい。 ・バランスよく食べることが健全な体を育成し、自身の人生を広げ豊かにすることを意識させてほしい。	・栄養黒板を人通りが多いところへ移動させたことにより、給食委員会の児童が、より責任感とやりがいを得ることに繋がった。
特別支援教育の充実	特別支援教育の推進	・校内委員会の活性化を図ることなどによる指導・支援の充実 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交流及び共同学習の充実	特別支援教育コーディネーターを中心とする特別支援委員会で児童の特性に応じた指導や支援、適切な対応の方策の検討。 ・特別支援教育研修（児童理解の会・指導法の研修を含む）年3回以上の実施。 ・連携型個別指導計画の充実 ・あすなろ学級、ｴﾝｶﾚｯｼﾞﾙｰﾑ（特別支援教室やまぶきルーム）、副籍交流の理解 ・全学年でのあすなろ学級との交流学習の実施。	・特別支援教育委員会を毎月実施。個に応じる対応策、手立ての考案。 ・毎学期の連携型個別指導計画の成果と課題の記載。 ・児童の授業への参加80%。 ・特別支援教室の理解教育を実施（1年生） ・あすなろ学級、やまぶきルーム、特別支援について、学校だより、保護者会で説明する。学校ホームページで毎学期紹介する。保護者ｱﾝｹｰﾄ80%以上。 ・複数の教科で毎週交流学習を行う。	B	B	・全教員で巡回心理士による通常の学級における特別支援教育研修会を実施した。 ・特別支援教室の巡回指導に伴う巡回心理士の行動観察の際に、特別支援教育コーディネーターと担任が指導助言を受けることで通常の学級での支援の仕方を学び生かしている。 ・一学期に、特別支援教室の理解教育を実施した。児童同士が個に応じる学習を理解している。 ・あすなろ学級、やまぶきルーム、特別支援について、学校だより、保護者会で説明したが保護者アンケート79%であった。 ・児童の授業への参加99%達成。	B	・子供同士の理解を十分にさせることが大事である。 ・江戸川区特別支援学級連合展覧会を見学し、あすなろ学級の作品に感動した。指導の結果である。 ・学校側の負担増、ある一定の教員への負担増、「すべてに対応できない」ことが気にかかる。 ・理想は、全ての子供が同じ教室で学ぶことだが、現実は難しい面もある。先生方の負担増が心配。	・巡回心理士の行動観察に伴う指導助言を全教員で理解する。 ・特別支援教育委員会において、個に応じる対応策や有効な手立てをデータとして引き継いでいく。 ・毎学期の連携型個別指導計画の成果と課題の記載を1カ月単位ごとに行えるように月1回15分程度の取り組める時間を設定する。 あすなろ学級、やまぶきルーム、特別支援について、ホームページなどで知らせる機会を
教員の資質向上	教員研修の充実	・学習用タブレットを活用した授業実施に向けた研修	・各学年に応じた授業での効果的な使い方ができる。	・ICT研修を毎学期行い、授業で活用できる。 ・全教員がTeamsを活用した配信を行うことができる。	B	B	・年間3回の研修（研究授業を含む）を実施した。タブレット導入により、追加で教員研修を2回実施し、使い方を共通理解した。保護者・児童アンケートもTeamsを活用して実施した。図工科でタブレットを活用した研究授業を実施した。	B	・ICTの取り組みは、継続的に進めてもらいたい。 ・研修を定期的かつ全員で実施していることは評価できる。 ・ICTはある面で効果を発揮するが、万能ではない。その他の研修も充実させてほしい。	・指定の研修の実施に加え必要に応じた研修を随時導入し、ICT 機器の有効な活用をさらに進める。
	児童理解による適切な対応	Q-Uテストを生かした学級経営	・Hyper―QU実施後の結果分析により学級経営の見直し、二学期から改善を実施。	・要支援群のふれあい月間アンケートプラス評価。 ・児童アンケート90%以上	B	B	・6月にHuper－Quを実施し、結果を児童へ配布する際に面談を実施し、個々指導を行った。また気になる児童は夕会で情報共有を行った。児童アンケート「相談できる先生」88．5%あり児童が安心して相談できる環境にある。	B	・「誰一人取り残さない」を目標に子供に対してていねいに取り組んでもらいたい。 ・相談できる先生90%超を目指してほしい。教科担任制は、担任だけでなく様々な視点で子供を見守る利点がある。全児童を全ての教員で見守る空気の醸成を願う。	・区からの予算が付けば2回実施して児童の変容をより見ることができる。
特色ある教育の展開	外部人材を活用した体験的な学習の充実	様々な分野の専門家による出前授業の実施や校外学習などにより、児童の興味関心を高める。	・学級ごとに、専門家による広く深い学びを得る機会や体験をする機会をつくる。	・各学年の授業に年間1回以上の実施。全校児童での芸術鑑賞教室の実施。児童・保護者ｱﾝｹｰﾄ90%以上	B	B	・各学年、校外学習を実施した。さらに外部人材を活用し1年鍵盤ハーモニカ、2年ザリガニ、3年味覚学習、4年プラネタリウム、5年自動車工場、6年ブランクトンの学習を実施した。どの学年も意欲的な学習につながった。児童・保護者ｱﾝｹｰﾄ95%	A	・外部人材の活用は、たくさん行っていて積極的でよい。 ・専門家呼ぶことは児童の世界を広げている。引き続き取り組んで欲しい。今後は、地域の方にも輪を広げて、地域を愛する大人に成長してほしい。	・専門家による出前授業の範囲を広げ児童の興味関心をさらに引き出し効果的な学習につなげる。
	たてわり「なかよし班」での活動の工夫	工夫した取り組みを通して、思いやりの心と行動ができるようになる。	・なかよし班の活動を行う。	・年8回実施。 ・児童・保護者アンケート90%以上。	B	B	・感染症対策を講じて、なかよし班活動は8回実施し、なかよし班フェスタも実施した。 児童アンケート96．5%保護者ｱﾝｹｰﾄ80%	B	・地域での遊びがやりにくい中、なかよし班活動は、大事な取り組みである。 ・子供に必要な「心」の成長につながる。	・感染症対策を講じた上でも、充実した活動になるよう活動の流れを工夫して実施する。
	保護者・地域に向けた教育活動の積極的な発信	学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ、学校だより、学年・専科だより、手紙、学校公開、道徳授業地区公開講座、学校保健委員会、個人面談等で発信	・学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ、学校だより、学年・専科だより、手紙、学校公開、道徳授業地区公開講座、学校保健委員会、個人面談等で発信する。	・学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼ（学年・専科）毎週更新。学校だより学年専科だより等月一回。学校公開、道徳・学校保健(状況に応じて)実施する。地域保護者ｱﾝｹｰﾄ80%以上	B	B	・学校便り、学年だよりは月1回発行、ホームページは週1回程度更新した。感染予防を講じて、体育公開を2回、授業公開を3回、学習発表会・夏休み作品展・書き初め展の保護者公開を実施した。 地域保護者ｱﾝｹｰﾄ91%	B	・「学校だより」にQRコードを入れる等の改善の取り組みは、評価する。 ・地域の方々にどのように発信していくかが課題。正門横の掲示版の充実。	・学校ホームページの充実に努めるとともに、タブレットを使った発信の方法もさらに広げる。
	挨拶・返事のできる児童の育成	挨拶・返事ができる。	・生活指導重点目標として年間を通じて取り組む。	・児童アンケート90%以上。 保護者アンケート80%以上。 教師による見取り。	B	B	・挨拶ができてきるかのアンケート結果では、児童アンケート88．5%。保護者アンケート75%と学校内での挨拶は昨年度よりも改善されてきているが児童と保護者との認識の隔たりがあることから、家庭でも挨拶が充実できるように来年度は取組を考えていく。	B	・挨拶や言葉遣いは、家庭での取り組みが大切である。 ・大人が模範となることが大切。	・挨拶の認識を家庭や地域まで広めて取組むことができるようにする。
	思いやりのある児童の育成	相手を尊重する友達への言葉かけや行動ができる	・あたたかい言葉や行動ができるふれあい月間、授業など実施	・児童アンケート80%以上 教職員による観察	B	B	・ふれあい月間では、ふわふわ言葉やちくちく言葉を考え、相手へのいたわりや思いやりについて重点的に取り組んだ。その結果と児童が意識が高まった。保護者アンケート97%と高い評価を得られた。	B	・思いやりを育てることは、家庭と学校との「連携が大事である。 ・学校教育のすべてに関わること。日々のちょっとした積み重ねを継続することに意味がある。	・ふれあい月間の新たな取組を考える。